

しもきた エアポケット
下北沢の 一角

平成18年12月6日

原告 笹川史郎

1 下北沢駅前食品市場と私の店

下北沢の北口の階段を降り、右へ回れするとそこに古いマーケットがあります。全体が屋根に覆われていますがこの建物の入り口に「下北沢駅前食品市場」と立体文字が記されています。「沢」と「驛」が共に旧漢字のまま残っていることが示すように、ここは終戦間もなく出来た闇市跡と聞きます。この時代から取り残された^{エアポケット}一角に私と友人が共同経営している店「ラーメン・酒 しろろ」があります（写真資料1）。その他にも飲み屋が現在、五軒点在しています。カラオケが歌えるカウンターだけの店や、若者が集う屋台風音楽居酒屋、三代目となるおでん屋台、つい最近に出来たフランス風居酒屋と立ち飲み風焼鳥居酒屋です（写真資料2）。

私の店は午後七時から深夜三時まで開いていますが、早朝六時を過ぎた辺りに共同経営者の友人が来て、また開きます。そして、午後二時頃までやっています。

こんな時間帯に開店するのは非常識のようにおもわれるでしょうが、それがこの店の特徴であり、お客様に必要とされているのです。早朝に来るお客様は主に同業者か深夜に仕事をしている人々ですが、時に独り暮らしの老人、または独身の男女が人恋しくてやって来ます。もうそれほど飲めないのに一杯だけ注文し、酔いながら客同志、友好を深め、時には口喧嘩したりしながら時を過すのです。

私も友人もこういう方々に支えられ、またお客様もこういう店に支えられて生活していることは否めない事実です。

携帯電話のメールやネット上の交換日記でコミュニケーションを取るようになった現代、私どもの店のように人と人とが肌のぬくもりを感じるほど近くで交友

を深めて行くという事が出来にくくなって来ています。それゆえに私どものような店の存在が今も必要とされるのでしょう。

このように旧態依然とした店、あるいはこういう「一角」^{エアポケット}が人間にとって絶対必要であると言うことはこの店を経営し、多くのお客様と接して来てわかることです。

先程述べたおでん屋台は六十数余年、私どもの店は先代の頃から計算しますとこのマーケットの中で三十数余年続いていることとなります。その中でいろんなお客様がやって来てはしばらくの間、毎日顔を出すくらいひんぱんに出入りし、あるいは仕事の事情やその他の私的な事情で遠のいたりして時間が過ぎて行きました。

2 下北沢との関わり

私がこの下北沢に住んだのは一九八五年の春です。当時、二十三才でした。小説家を志して大阪より夜行バスで上京し、しばらく高校時代の友人の下宿にやっかいになってからこの下北沢に部屋を見付けて移り住んだのです。三畳一間で水道付き、トイレは共同で家賃は一万円でした。

フリーターという言葉がまだ無い頃、私は下北沢でアルバイトを見付け、主に飲食店を転々としながら、夜はこのマーケットにやって来て、おでん屋台を中心に飲み歩いて二十代の大半を酒とアルバイトで過しました。その結果、胃かいよを二度患ったり、小説の創作に行きづまり酒の席で喧嘩ばかりする時期があったりしましたが、そういう酒の席で出会った人々と仕事を共にしたり、あるいは花見、スキー、温泉旅行に出掛けて喜びを共有したりと二度とない青春を謳歌したものです。

和風スパゲティ屋から始まってジャズ・バーを二軒、友人のバー、スナック、下北沢にある店が出した海の家、いろんな飲食店にお世話になりました。みんな下北沢にある店です。

そんな店を巡ってから三十近くになって編集記者の仕事を始め、その後、映像関係の仕事を経てからまた水商売に戻って来ました。そして、現在の店を営むのに至ったのです。

3 再開発によって失われるもの

その間、私を支えてきたのは下北沢の飲食街であり、この駅前のマーケットでした。

つらい時、悲しい時はこのマーケットにやって来て赤提灯の下で黙って酒を飲む時もありました。

このような私と同じようなおもいでこの界限を愛している人々は一杯います。それは私がこの二十一年間、この街に暮らし、働いて来た結果わかったことです。

なにとぞこの憩いの空間を私たちから奪わないで下さい。

もしそれでも必要と言うならば、せめて開発計画を推進するに当たってもう少し多くの住民や商業者の意見に耳を傾け、アイデアを出しあって共に街を作っていくという体制を作るべきではないでしょうか？

国と都と区、そして街と人とが一体になって自らの住環境を良くして行く、ということが今ここで始まらなければ我が国、そして我が街の人々はこの先、日本の心を失くした歴史的深味のない無機質な冷たい世界の中で暮らして行かなければならない結果となるのではないのでしょうか。

私はそう思い、この街の未来を案じています。今ここで起っていることは今この国の最重要問題に思えてなりません。

以上



1. 私と友人が共同経営している店「ラーメン・酒 しろろ」
狭い空間で肩を寄せ合うと、自然と会話が生まれる



2. 下北澤驛前食品市場
戦後の混乱期からずっと下北沢の台所を支えてきた。